慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	自然的地理的環境の経済学的考察 主として社会的経済的発達の要因又は条件としての自然について
Sub Title	
Author	伊藤, 秀一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.7 (1925. 7) ,p.1052(108)- 1090(146)
JaLC DOI	10.14991/001.19250701-0108
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19250701-0108

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

自然的地理的環境の經濟學的考察

主として社會的經濟的發達の要因又は條件としての自然について

伊藤秀一

一

Gustav Schmoller は其の大著「國民經濟學原理」第一卷劈頭に於て國民經濟の外的自然に對する倚繋關係を論じ次の如く言說して居る。

「人間、人間社會及び國民經濟は地球の表面に營まるゝ有機的生活の一部分である。一切の國民經濟現象が大なる自然行程の一部なることは、政治的生活及び精神的生活に比して遙かに明確であつて疑ひの餘地を存しない。斯くて自然の法則が國民經濟現象を支配するのは恰も之が物理的、化學的及び有機的生活を支配すると異なる所なく、人力の如何ともす可らざる所である。故に國民經濟上自然の大なる秩序から逸出し得る範圍は毫も存しないのである。而も猶、人は、自然と文化、自然と國民生活、自然と國民經濟とを各々對立せしめ、又彼自身及び彼が直接保持者として又所有者として支配し且つその技術に依つて變形したる所のものを、外界自然の他の一切のもの、夫等の力及び影響とに對立せしめる。自然は彼にとつては、外部の、强大なる、制御し得ざる形成（Gebilde）である。そは地球及び氣候、土地及び山嶽、空氣及び水、植物及び動物として彼に對抗する。自然は人間にとつては一の外部の力であつて、勿論或場合に於ては彼を進步せしむるけれども、而も亦之を阻害し勦滅せしめざれは止まない。人間は此の力と爭鬪し、此の力は人を支配し、又人は此の力を支配せんと欲する。自然の征服の如何に依つて人は貧窮となり又は富裕となる。技術による自然の形成及び變形が即ち經濟的活動の內容を形作るものである。樣々なる自然の力、樣々なる自然の富が、或は人間をして容易にその目的を達せしめ或は之を困難ならしむるは明白なる事實であつて、而も自然に對する此の倚繋の紐帶は或は短くして强く、或は長くして彈力性に富んで居るのである。斯くて先づ此の紐帶、此の切斷し難き關係、即ち地球と人間と、自然と國民經濟との交互作用が問題となるのである」を。（註一）。

Schmoller の右の所論は自ら二箇の命題を含んで居る。其一は、生物の一種屬としての人類並に人類社會其物は、畢竟自然の產物であり且つ自然と稱ぶ巨大にして無限なる總體の一部に過ぎないからして、人間の生活は決して此の大自然の大秩序から逸出し得ないといふ事である。洵に社會を一の組織として考へるならば、外界の自然特に我々の地球は――一切の自然力を含めて――社會に對する環境である。人類の社會は此の環境の外に考へられ得ない許りではなくて、人類社會の生活が確保せられて居るのは又當に自然が、之が生存を維持す可き所の環境を形成して居るからである。此の事を容認するならば、或る一定時或る一定の場所に於ける自然の狀態が、如何に人類社會の上に決定的の影響を與ふるかといふ事、又人類社會の全發展に對して如何に大なる影響を及ぼすものであるかといふ事が直ちに考へ得られるのである。土地の構成狀態即ち山脈、溪谷、水流の分布、

土壤の性質等、氣候即ち其の寒暖、乾濕の度並に風力等、更に又陸地と海との分布狀態並に動植物の種類――總て之等のものが人類の社會生活の上に及ぼす影響は決して之を拒む事が出來ないであらう。故に人が一の組織に就て考察し論議する場合に於ては、必ずや、之が環境に對する關係を度外視するを得ないのである。

然るに他方、人は自然と文化、自然と人類社會とを對立せしむる。人は强大なる自然の力と艱難なる鬪爭を續けて、之を制御し支配せんと欲する。蓋し自然を征服し支配する事の成敗は社會的進歩を左右する動因となるものである。而して人が技術に依つて自然に作用し之を變形するといふ事が、即ち經濟的活動の內容を形成するのである。換言せば、經濟とは人間の欲望を充足するために物質的手段を不斷に供給（使用及び保持）する事を主眼とする處置を總括するものであるが、此の經濟的目的を達せんがために先づ行はれるのは疑ひもなく生產の行爲である。然るに人は決して新しき物質又は新しき力を創造することはないのであるから、生產とは畢竟旣存物に對して合目的的に作用し且つ之を變形する事を意味し、而して之を行ふに當つて、人は常に其の働きに一定の順序を立て自然界の因果の法則を運用するのである。之れが即ち技術である。技術の發明と之れが使用とに依つて初めて人は自然を征服する、若くは更に嚴密に言へば、自然の法則を彼の目的に利用し自然をして人類社會に適應せしむるのである。此點から社會の進步は常に技術の發達に依存すると云ふ事が出來るのである。

人類社會と動物種屬との間の本質的相違の一つは又實に此點に存するのである。動物は其の欲望充足の手段を天與の自然物から獲得し來るに當つて專ら自然の拘束（Naturzwang）に服從して居る。彼等が自然の拘束に抵抗して進步成長を遂げるための唯一の手段は「肉體的適應」あるのみである。「唯此の手段に依つてのみ、動物は、その欲望を充足するに役立つ所の有機的世界――植物若くは動物に對して作用する。而も此種の動物にとつて之は、適應に依つて他のものに優逸するの可能、及び此の事に依つて彼等の欲望充足を場所的、時間的並に數量的に、自然の拘束から十分獨立的ならしむるの可能を前提としなければならないのである。」（註二）動物が自然に適應するのは之等動物の諸器官、即ち四脚や顎骨や鰭等の變形に依つてゞある。之は全然一の受動的な生物學的適應に他ならない。然るに人類社會が外界の自然に對する適應は一の能動的適應である。そは生物學的にではなくて技術的に適應するのである。即ち「自然的關係に對する反動は、人間にあつては、啻に肉體的適應に止まらずして體外的反動として生ずる。而して此の反動は道具及び器具（廣義の）の創造を以て初まる。動物が欲望充足を目的とする生存競爭に於て、若くは自然の拘束に對する鬪爭に於て、適應に依つて得たる肉體的手段を以つて之に對するに反し、人間は經濟に依つて得たる體外的手段を以て之に對するのである。」（註三）詳言せば、人類社會が自然に適應するといふのは畢竟、其れが環境自らに適應せしめ乍ら自らも亦環境に適應するの意に他ならない。例へば或る昆蟲とか鳥類とかゞ彼等の環境に對して保護色を持つて居る場合に於て、此事は當該有機體の何等かの努力の結果でもなく、又は外界の自然に及ぼせる彼等の作用の結果でもなくて、寧ろ生存競爭に依つて生じたる緩漫なる一種の無意識的發達であると云はなければならない。人類社會の場合は全く之と異な

る。それは自然と鬪爭する。彼等は土地を耕耘し、原始林を伐採し、家畜を飼育し、鑛山を發掘し、自然の力を制御して之を自らの目的に利用し、斯くて地上の形態其のものを變化する。動物が諸器官の變形に依つて自然に適應するに反し、人類社會は技術の形で器官の人工的組織を創造することに依つて自然に對する能動的適應を始めるのである。（註四）。

併し乍ら、此の理由に據つて、恰も人間を自然の支配者であるかの如くに過信し、自然を目的論的に解釋して、一切の自然物を專ら人類の欲望に適應せしめて考ふるならば、そは疑ひもなく一の謬想であると云はなければならない。蓋し人が自然に對する作用に於て先づ遭遇するものは、彼が之に加へんとする變化に對する自然の頑强なる抵抗即ち自然の拘束である。「諸々の自然力、多種多樣なる自然の富は、或は人間をして容易に目的を達せしめ或は之を困難ならしむる」自然的條件である。玆に於て此の切斷し難き關係、即ち環境と組織、自然と人類社會、就中自然と經濟との交互關係が最も緊切なる問題となる。此の組織の變化の原因は實に環境に對する之れが交互關係の中に求め得可きのみならず、其の發展の基礎も亦自ら當該組織がその環境に對して如何なる交互關係にあるかといふ事に依據して居るからである。

（註一）Gustav Schmoller; Grundriss der Allgemeinen Volkswirtschaftslehre. Erster Teil. 1908. SS. 127-128.
（註二）Ernst Friedrich; Allgemeine und Spezielle Wirtschafts geographie. 1904. SS 11-12
（註三）ebenda. SS. 13-14.
（註四）拙稿「社會と自然との平衡關係と『生產力』」（本誌第十八卷第十一號五三―五四頁及び五九―六〇頁。

二

外界の自然的環境が人間の社會生活及び其の歷史的發展に及ぼす決定的影響に就ては、既に古代希臘に於て Hippokrates 及び Strabo の如きが明確に之を指示して居る。此場合に於て、自然的環境は如何なる時代に於ても社會的發展の唯一の決定的原因であるといふ因果說が主張せられるのである。例へば Hippokrates の見解に依れば、氣候は先づ次の諸點に關する限りに於て人體に影響する。即ち寒暑、並に寒暑間の變化の强弱、更に空氣の乾濕の度合は種々なる方法で呼吸の難易を惹起し、從つて血液の循環を或は促進し或は緩漫にし、斯くて身體の活動を刺戟し又は弛緩せしめる。而して種々なる氣候的影響に馴化するといふ事から樣々なる國民の性質、即ち忍對力の强弱、懶惰、敏活、矯激、鈍重、剛勇等が形成せられる。然るに又種々多樣なる土地の形態が人體及び氣質に影響するは勿論、自然が個々の地方に與へる諸種の食料が人間の體格に影響するといふ事が之に附加せられる。即ち彼に依れば、此等の風土的要因が第一に人體及び人間の氣質を決定し。從つて又その行爲をも決定するのである。然るに社會とは人間の集合であるから、換言せば社會の特性は個人的特性の總體であるから、從つて自然的關係即ち氣候、地理的位置及び土地の形態が社會の性質を決定するとの結論が引出されるのである。（註一）

斯の如く、自然の影響は初め純然たる肉體上の影響として考察せられるのが普通であつた。寒暑の差、空氣の乾濕の度及び自然が個々の地方に與ふる食料の種類、之等のものが人體の特質を決定するのである。然るに他方、人間の精神上の特質は肉體上の特質に依つて左右せられるものであるから、從つて之等のものは同時に彼の精神上の特質を決定すると觀察せられた。此の時代に於ては

未だ氣候及び土地の形態が人間の勞働方法に及ぼす影響は顧られなかつたのである。素より或國民が主として農業を營み他の國民は特に牧畜若くは商業を營んで居るといふ事實は觀察せられたのであるが、併し之等職業の相違は之を國民の性向及び特質の相違に歸するのが一般であつて、各地域が其の土地に特有なる自然的地理的條件に從つて特殊なる職業及び技術に適するものであるとの思想が生じたのは、遙か後代の事である。即ち人間の文明が先づ地中海の沿岸に始まり、次第次第に擴大して中部及び西部歐羅巴に及び、然る後十五世紀並に十六世紀に於て亞細亞及び亞米利加の一部に擴張したといふ事實を通觀し、而して之等總ての國民の間に於ける、全然相異なる勞働方法及び技術的發展を認識する時に於て、始めて右の思想が生じたのである。そして之と同時に、最高の文化的發展を遂げた所は必ずしも自然の恩惠の最も豐饒なる土地ではなかつたといふ觀察から、又次の如き見解が生じ來る、餘りに過大なる自然の恩惠は人間を促して彼の肉體的及び精神的能力を間斷なく緊張せしむることがないから、それは文明の急速なる發展を促進するよりは寧ろ妨害するものであると。

此の思想は主として十六世紀に於ける科學の再興に伴ふて生じたるものである。Machiavelli の論敵にして Montesquieu の先蹤たる Jean Bodin は、其の歷史の方法論に關する著作 "Methodus ad facilem historiarum cognitionem" 1566 に於て既に之を指摘し、自然的條件が人民の性質及び歷史に與へる影響を論述した。Bodin は或る意味で今日の人類學的地理的歷史觀の先驅者であり建設者であると云はれて居る。彼は其の學說の基礎を疑ひもなく Hippokrates 及び Strabo より得て來たのであるが、其の氣候及び地形の影響に關する理論は遙かに之等の論者を超絕して新しき見解に導かれて居るのである。彼の主著 "De la République" の第五卷第一章「國家形式を多樣なる人民に適合せしむるために政府は如何に作らる可きか」は最もよく這箇の見解を包括する。Bodin に依れば人間の行爲は個人たると人民たるとを問はず、彼等の氣質 (Naturell) に依つて規定せられる。此の氣質は氣候に依つて左右せられるものであるが、而も啻に之れのみに依るものではなくて、同時に、其の上に人間の集團が存續し且つ彼等に生活資料を提供する所の土地の性質に依つて左右せられる。故に氣候のみが住民の性情を決定するのではなくて土地の形態が又之を決定する。從つて同一の氣候的關係の下に於ても亦種々なる「氣質の異種」が生じ得るのである。一般的には、各々の國は其國獨特の人民の性格を鑄造するけれども、而も屢々、此のものゝ內部に於て再び種々なる氣質の相違が見出される。山地の住民と溪谷の住民との相違、島の住民と海岸の住民との相違の如き之である。

Bodin は進んで次の如く主張する。地理的環境は異なつた地方の人々に異なつた生活資料を供するのみならず、更に彼等の勞働行爲（勞働方法）に影響する限りに於て再び其の氣質に影響を及ぼす。例へば土地から充分なる生活資料の供給せられて居る所に於ては、人間は左程努力する必要がないから、從つて彼の肉體的精神的能力は退步する。之に反して豐沃ならざる土地に於ては、人口の增加に伴つて、之等のものゝ生活資料を同時に增加することに努めなければならないから、頭腦も肉體も常に勞働のために奉仕しなければならない。此の事は一定の體力、能力及び熟練を發達せ

しめ、進んで一定の科學の發展を導く。故に土地から充分の生活手段を與へられて居ない國民は必然的に產業的（industriell）である。而して彼等は其の產業の所產を以つて、彼自身の土地から得られない生活手段と交易することを求める。斯くて原始的の商業取引が生ずる云々。斯の如くして、土地の形態が樣々なる勞働方法を生じ、從つて又特殊の能力を生ぜしむるといふ事に依つて、個々の地方に於て全然異つた人間の特質、天賦及び性向が形成せられるとBodinは言つて居る。（註二）

次にMontesquieuの"De l'Esprit des Lois" 1748は此等の關係を論じたるものとして最も屢々擧げらるゝものである。彼は氣候の影響を以て國民の特質を決す可き唯一の要因、少くとも最も重要なる要因なる事を力說する。例へば右の書の第十四卷第二章に於て其の因果觀を次の如く明示して居る。「寒冷なる空氣は肉體の外部的纖維の末端を收縮せしめる。此の事に依つてその纖維の伸縮性を增加し、且つ外部から心臟へ向つての血液の循環を助長する。そは又此等の纖維を縮め從つて夫等の力を增加する。之と反對に、暖き空氣は纖維の末端を弛緩し伸長する。此の事に依つて勿論、夫等の力と伸縮性とは減ずるのである。故に寒冷なる氣候の人民は大なる生活力を有して居る。其處では心臟の作用と纖維の反作用とが一層よく行はれ、四體液の調和が一層大であり、血液は一層よく心臟に向つて流れ、從つて心臟は一層大なる强さを持つ。此の强さの優逸は幾多の效果を生むに相違ない。例へばより大なる決斷即ち大なる勇氣を、自己優逸のより大なる感情即ち復讐の念の減少を、より大なる確信即ち大なる卒直を生み、邪推、譎詐及び陰險の性を脫せしむるのである。略言すれば、此の事は非常に違つた氣質を生ぜしむるに相違ない」と。（註三）

又彼は、土地の狀態が其の土地の住民に及ぼす影響に就て語つて居る。例へば、山嶽地方の住民が自由を愛するに反し、平野に居を住むる安逸なる農民が容易に專制的支配に隷屬する傾向ありと述べて居るが如き之である。曰く「豐沃なる土地は、如何なる國に於ても、自然に對する服從と從屬とを設定して居る　農民が人民の主要部分を構成する所では、彼等は其の自由を維持するに左程熱心ではない。彼等は私事を營むに餘りに多忙なのである。富の充滿せる國は唯刼掠を恐れ軍隊を恐れる。……斯くて豐饒なる國に於ては最も屢々王國が見出され、豐饒ならざる國に於ては共和政體が見出される。而してこは土地の不毛に依つて蒙る可き不自由に對しての充分なる報償である」（第十八卷第一章）と。（註四）同樣のことは又其の第二章に於ても覗はれる。總括的に之を見れば、如何に文明が外的世界の活動に依つて變化せられるか、人民の法律及び其の社會的道德的生活の他の結果が、如何に氣候、土地及び食料と關聯して居るか、之れがMontesquuieuにとつて根本的問題であつた。彼は此の問題の解決のために全力を傾注したのである。這般の問題に關する彼の所說は後代に亘つて絕大なる影響を及ぼして居る。併しBodinとは異なり、自然的地理的環境が人民の經濟的活動力に及ぼす影響、及び此の活動力が彼等の知識並に才能に及ぼす影響に就ては、彼は殆んど之を知悉しなかつた樣に思はれる。（註五）

（註一）主として Cunow の解說に據る。Die Marxsche Geschichts-Gesellschafts-Staatstheorie. I. Band. S. 27

（註二）Palgrave; Dictionary of Political Economy. Vol. I. pp. 160-161. Friedrich Ratzel; Anthropogeographie. I. Teil. 3. Auflage. 1909. S. 10. Cunow. a. a. O. SS. 66-68.

（註三）Montesquieu; The Spirit of Laws, translated by Thomas Nugent. Vol. I. 1873. p. 225.

（註四）ibid. p. 372

（註五）Robert Flint; Historical Philosophy in Flance. 1893. pp. 274-275.

III

然るに十八世紀に於ける獨逸の歴史哲學者として著名なる Gottfried Herder は、氣候の影響又は地理的の環境が人類の歴史的發展行程を規定するといふ見解を著るしく深化せしめて居る。Herder にありては、其の全自然觀に於て彼と密接なる關係を有する Geothe に於けると同じく、自然は一の生きたる實在である。「核もなく殼もなく自然は直ちに一切である。」"weder Kern noch Schale, alles ist sie mit einem Male" (Goethe) 全宇宙は其の强大なる成長と建設との中に一の生命を呼吸して居る。至る所に同一の法則が作用し至る所に同一の合法性が支配して居る。然らば宇宙の一部に過ぎない人類の歴史も亦合法的に經過す可きではなからうか。神は自然に於て一切のものを計畫的に秩序立てた樣に、人類の歴史に於ても亦秩序と合法性とを設立したのである。Herder は言ふ、「余が歴史の中に求むる神は自然の中にあるものと同じでなければならない。何となれば、人間は總體の一部に過ぎず、この歴史は蟲の歴史と同樣、彼の住んで居る組織 (Gewebe) と密接に關係して居るからである。」Herder の神の意志とは當時「自然の意志」と呼ばれたものと同一である。

斯くて神が一切の自然及び歴史の經過の眞の動力であるならば、發展の行程は因果的制限の中に極めて合法的に行はれるのである。其れ故に人類の歴史は、其合法性と因果的關係とに於てのみ考察せられ得るであらう。然らば人類の歴史的發展行程を決定するものは何乎。そは氣候の影響若くは寧ろ地理的環境に他ならない。

Herder は、人間が一定の天然の素質を有する事は之を認容するけれども、如何なる發展行程も此の天然の素質からのみは決して生じないと見て居る。曰く、「人間が一切を生み、其れを外界の對象から離れて發展せしむるものとすれば、素より此場合に於ても人間の歴史は可能ではあるが、人類、其の全種族の歴史は不可能である。」(Ideen zur Geschichte der Menschheit, I. Teil. S. 176.) 氣候、即ち地理的環境が一定の素質に作用し、次第に熟練に向つて變化する能力を覺醒し、且つ之を促進せしめて初めて進歩が生ずる。即ち「互に連續する努力」が生ずる。而して此場合に彼は氣候の概念を、その先驅者の何人よりも遙かに廣く解釋した。彼は此の概念の下に、寒暑、空氣、風、地形、動植物等の特質を理解した許りではなくて、之から生ずる生存競爭のための社會的條件をも理解した。彼の思惟する所に依れば、自然的生活範圍が或程度迄社會的環境を規定する。例へば、一定の勞働行爲や生活方法が發生し得るためには一定の自然的前提條件が必要である。換言せば、一定の地域の特質は、常に其の住民の勞働行爲及び勞働の產物を決定する。何故かといふに、之等のものは主として、自然に依つて備へられたる條件の下に於て、自然の與ふる原料を或は獲得し或は加工する事に於て成立つからである。故に夫等は、例令種々なる程度ではあるが、常に自然的條件に結び付けられて居る。從つて自然は又人間の生活方法を規定するのである。例へば魚獵や航海は乾燥したる高地に發生し得ないし、又狩獵の如きは、狩獵し得可き野獸の居らない島では到底主要なる職業となり得ないのである。一定の勞働用具や技術上の熟練に關しても同樣であつて、此等のもの

は、自然が之に必要なる材料を供給する所に於て初めて發生し得る。銅や鐵のない所では鐵又は銅を加工する技術の發達する事なく、北極地方の如く耕作の不可能な所では、當然、耕作用具の使用さるゝ事も發明される事もないのである。併し Herder は、氣候の影響が全然能動的の要素であつて、人間がその肉體的精神的素質を以てして猶且つ單に受動的要素に過ぎないと解したのではない。一方に於て、自然の環境が人間に影響し、特殊な能力や勞働方法を發展せしむるとすれば、他方に於て、人間の能力や勞働の組織が再び自然的環境に反動の作用を及ぼし、且つ之のものを變化するといふ事は、明に之を言明して居るのである。

次に、此の「種々に變化する氣候」若くは自然の環境が、如何にして此の發展に影響するかと云ふに、それは人體の組織、肉體の力や心理的の活動、彼の感情生活、感覺及び本能等に影響を與ふることに依つてゞある。此の見解は根本的には Montesquieu の見方と一致して居るのであるが、Herder は更に進んで、總ての特殊なる人種の特性は其の肉體的のものなると心理的のものなるとを問はず、直接、氣候若くは自然的環境に歸するのは正しくない。人間の特質はもつと遙かに複雜であると論じて居る。又彼は Montesquieu と異なり、人間の觀念の世界は、彼が其の自然の生活環境の中に、又此の環境に依つて條件づけられたる社會的生活關係の間に目擊する所のものに依つて、即ち觀照の世界に依つて規定せられるといふ事を主張して居る。換言せば自然は自然の環境即ち觀照の世界として彼の「想像力」の中に入り來り、此の事に依つて著るしく彼の觀念世界に影響し、斯くて再び人間に影響を與ふるのである。

而して最後に、人類の悟性（思惟、思考、欲望）は彼の生活方法によつて左右せられると論ぜられる。何となれば、人間は「到る所に於て、生活方法の必要の下に成長した」所の「傳統と習慣の嫡子」だからである。然るに、既に述べた樣に、彼の見解に依れば人間の勞働行爲及び生活方法は自然の環境に依つて制約せられるものであるから、自然的地理的環境は間接に、人間の思想の上に決定的の影響を有して居るのである。（註一）

Ratzel の考察を以てせば、Herder の學說の意義は次の點に存して居る。「彼は、人民の部分的考察から人類の總體的理解へ、時宜的の注釋から總括的說明へ、斷片的な世界史から眞の人類史に向つて中間の障壁を突破して居る。Herder は、彼以前の何人よりも、深淵といふよりは、寧ろより廣汎にして包括的なる觀察を以て、人間及び其の歷史が自然的條件に依遷することを考察した。彼は根本思想の上に於ては、知識よりも自由なる推察に依り、人間は啻に個々のものが無數の自然的條件に依賴して居るといふ理由からのみではなく、此の地球の上に地球と共に生じた所の人間が自ら地球の一部であるといふ理由に基いて、地球を顧慮する事なくして人間を理解する事が出來ないといふ事を言說して居る。…Herder はその大なる統一的世界觀に依つて、總ての彼の先驅者の時宜的の考察以上に遙かに進んで居る。其の學徒の下に於て Carl Ritter ですら到達する事の出來なかつた樣な高所から、彼は諸々の星の間に於ける一つの星としての地球、惑星系に於ける其の位置と發達、而して又地球を形成する所の山脈や海洋を考察して居る。此の場合に於て、此の事は一の歷史哲學の著作に對する自然科學的序曲として取扱はれて居るのではなくて、其の下に人間が一

定の立脚地を得て居る所の、種々多樣な性質の組織に對する一大工場としての地球を描出して居るのである。」(註二)

(註一) 主として Cunow; a. a. O. Bd. I SS. 195-199. Bd. II. S. 166. を參照せり。
(註二) Ratzel; a. a. O. S. 15.

四

Herder の叙上の思想を基礎として、Carl Ritter は、地球の自然的形成が宿命的に人類文化の發展を豫定するものなりとの觀念を、彼の豐富なる經驗的、地理學的知識、並に哲學的思想に依つて支持せんと努めた。(註一)即ち彼は地理と歷史との不可離的の結合を明にし、「單なる偶發的の歷史的混同物と地理學上の歷史的（必然的）要素とを截然區別して考察す可き事、換言せば歷史を地理學的に觀察するの必要を强調したのである。併し乍ら勿論、歷史的現象の因果關係を全然、自然的地理的條件からのみ導き出さうとしたのではない。彼は「人類は常に自然の暴力の束縛から、人は常に益々彼を生める土塊から解放せられる」と云つて居る。彼に依れば、「人類の住家」として考へられる地球は、人間が彼の作つた新しき機關に依つて環境に對する新しき關係に自らを適應せしむる事に依り、之れと同時に地球そのものゝ蒙る變化とに依り、決して同一のものとして停止して居らない。人間は、常に益々此の地球に慣れ親しみ、愈々益々之れと調和する。斯くて、密なる適合と賢明なる利用とによつて、彼等の關係を增大せしむるのである。(註二)

Ritter の提出したる諸問題を踏襲し、Herder の歷史觀の影響の下に於て、這箇の見解を廣汎なる人類學地理的歷史觀の中に總括したるものは Friedrich Ratzel である。Ratzel は其の著 "Anthropogeographie" に於て曰く「斯學は人類を包含する地球を探究するものである。實に人類の生活は之を、植物及動物の生活が然かある如く、殆んど地球から分離して考察する事は出來ない。地球と、其の上に生じ且つ存續する人類生活との間の交互關係は、兩者の必然的鏈環に依り特殊の研究對象とならなければならない。さて此の問題の地理的方面は疑ひもなく重要であり、同時に最も接近し得可き方面である。斯學の意義は、自然、環境、場所に屬して居るものと、人間に屬して居るものとが常に比較せられる所の行程に存して居る。同じ形の岩壁が常に同じ形で波浪を擊碎して居る如く、一定の自然的條件は、人類生活の運動に對し、常に一定の方向を示し、或は其れを永續的ならしめ或は同樣の意味で制限と條件とを與へる。此の事は、それが個々の歷史的事件のための場所であるといふ事以上に遙かに大なる意義を示して居る。此は人民の歷史の變化に於ける一の永久性である。海洋の然る如く、人類は同樣、地球に其の根柢を置いて居る。此の二つのものは最も狂暴なる嵐の後、その自然中に横はれる結合に依つて再び密接に結び付くのである。國家は自然に縛られて居るといふかの Carl Ritter の言葉は單なる譬喩以上のものとして想起せられる。人間がより高き著眼點に立つて歷史を觀察するならば、人間の群集の流れが泡立つ所の河床が、實は確固たる殆ど不變的な河床である事が一層明かになるであらう、そして人は明に、歷史上に於ける地理的要素の必要を認めるであらう。此の事を基礎として歷史的經過の自然的條件を研究する所に斯學の重要性が存して居るのである。」(註三)

此の言に依つて Ratzel の態度は自ら明かであらう。而して彼の歷史觀は Herder の歷史觀の哲學的なるに比して遙かに經濟學的である。彼は或國民によつて居住せられる地理的生活環境が、その範圍の廣狹、居住に適するの程度、土地の形態乃至その構成狀態に依つて、如何に著るしく人口の密度や住民の經濟的生活方法及び交易關係に影響し、同時に社會的政治的組織に影響するかを論述して居る。（註四）

（註一）Schmoller; Grundriss. I Teil. S. 128.

（註二）Paul Barth; Die Philosophie der Geschichte als Sociologie. 1897. S. 227. Ratzel; a. a. O. SS. 20-21.

（註三）Ratzel; a. a. O. S. 9.

（註四）此點に關する Ratzel の見解に就てはやゝ詳細の記述を必要とするけれども本文の愈々冗長に亘るを恐れ、總て之を省略して後日の機會に讓ることにした。

五

以上筆者は、外界の自然的環境が人間の社會生活及び其の歷史的發展に及ぼす影響に關する見解が如何なる徑路を辿つて發達したかに就いて少しく歷史的考察を加へた。即ち、其の初め自然的地理的環境の影響は專ら身體に及ぼすものとしてのみ觀察せられたのが、後に至つて、そは直接、人間の勞働手段又は生活方法を規定するものであるとの見解に導かれ、而も畢竟此の自然的環境が人類の歷史的發展を決定する最大の要因であるとの觀念から所謂人類學地理的歷史觀を建設せんとする企てが生じたといふ事を瞥見した。勿論後代に於ては、其等の論者の間に於ても、人間の能力及び勞働方法が自然に反作用を及ぼし、從つて自然的環境を變化するといふ見解が著るしく重視せらるゝに至つたのであるけれども、其れにも拘らず、自然的地理的環境を以て社會的發展の決定的原因と見る因果說は、甚だ有力なるものであつた。

然るに他方に於ては、自然的事情が社會的變動を或は促進せしめ或は遲緩せしめる重大なる原因なることは之を認むるも、之れのみを以て決定的原因なりとする議論とは正に反對に、寧ろ社會的環境が自然に及ぼす反動的影響を以て遙かに重要視す可きものなりとする見解が生じた。茲に於て、社會的進步に於ける自然的諸要素の意義を專ら强調力說する在來の學說は、著るしく制限せられるのである。例へば Bagehot が "Physics and Politics" に於て、「往昔の論者は、氣候、否寧ろ土地、海洋、空氣及び自然的條件の總和に依る直接的影響が人々及び諸人種の分化を生ぜしめたと想像した。そして其れは甚だ自然的な觀念であつたが經驗は此の事實を否定して居る」（註一）と云ひ、更に「氣候は明かに國民を作る力ではない。何となれば氣候は常に斯の如き力ではなく、且つ國民は屢々氣候の力を借らずして形成せられるからである」（註二）と斷じ、自然的要因を過重する論說に對して、經驗に基く反證を列擧して之を駁擊するが如きは、問題の性質上姑く之を除外するとしても、Spencer が社會現象を左右する要因として、氣候、土地、動植物等の有機的無機的環境に對して第二次的の要素又は社會的要素を擧げ、進步せる社會に於ては此の後者の意義遙かに大なりと指摘せる一事の如きは、決して之を看過する事が出來ないであらう。

Spencer は、社會が其の有機的無機的環境に對して進步的の變化を與へるといふ事を指示して居る。例へば氣候の變化は山林の開拓、沼澤地の排水乾燥に依つて惹起せらる可く、有用植物の栽培

を以て有用ならざる植物に代へ、有用植物の良種を次第に增加し、又新有用種植物を扶植する等の事に依つて、植物の種類と量とを變じ得可く、同樣に動物界に對しては 有害動物の驅除又は撲滅、有用種の飼育、外國種の馴化等に依つて之れが量と質とを變じ得るであらう。「一社會の有機的無機的環境が、社會進步の行程に於て如何に不斷の變化を遂げたかを了解するためには、嘗て狼の棲める森若くは野禽の住める沼澤地であつた所の同一地方が、今日、穀物と家畜とに滿たさるゝ平地になつて居るといふ此の著大なる對照に想到するだけで充分である。而して此の變化が最も重要なる社會進化の第二次的要素となつて居る。」（註三）又曰く、「此の諸種の超有機的產物の秩序は、各々其の中に新しき種屬を發達せしむると共に、更に大なる組織に成長し、相互に作用し又作用を受けつゝ、異常に廣大なる、異常に複雜なる、且つ異常に有力なる影響を及ぼすものである。之等のものは、社會進化の途上に於て、斷えず個人及び社會を變化せしめ、同時に又、此の兩者に依つて變更せられる。斯くて之等のものは、次第に、我々が社會其のものゝ無生部分若くは第二次的の環境として考察し得可き所のものを形成する。此の新しき環境は明かに、本源的の環境よりも遙かに重要となる。――然り、遙かに益々重要となる、蓋し元來斯の如き社會を打立てるための障碍となる可き無機的有機的狀態の下に於て、猶且つ高級な社會生活を建設するの可能が生ずるからである。」（註四）故に本來の外部的要素を觀察し、之等の及ぼす影響を見るならば、社會進化の初期の階段に於ては、其の後の階段に於けるよりも、地方的諸條件に依賴する事遙かに大であつたといふ事實に到達するのである。然るに立派に組織され、技術器具の豐富なる、又知識的に進步せる今日の社會は、幾多の人工的の援助に依つて、天惠乏しき土地に於てすら猶且つ繁榮し得るのである。弱き無組織的の社會は斯く爲すを得ない、そは只管自然的環境の恩惠に依賴するのみであると。（註五）

茲に於て吾人の想起するのは、更に一步を進め「經濟的環境」が次第に勢力を占むるに從ひ「物理的環境」の影響の次第に減ず可きの理を說ける、換言せば社會の生產力が愈々發達するにつれて其の社會の生產方法が一定の地理的範圍に於ける自然的條件から愈々益々獨立して行くことを論述せる、Karl Marx の所說である。筆者は以下這般の問題に關する限りに於て彼の社會進步學說を覗ひ、少しく詳細に亘つて之れが考察の筆を進めようと思ふ。

（註一）Walter Bagehot; Physics and Politics. 1883. p. 84.
（註二）ibid. p. 86.
（註三）Herbert Spencer; The Principles of Sociology. vol. I. pp. 10-11.
（註四）ibid. p. 14.
（註五）ibid. p. 36.

六

Marx に據れば、社會の眞の基礎は云ふ迄もなく經濟的構造又は經濟的組織である。此の基礎の上に法制上及び政治上の上層建築が構成せられ、又一定の社會的意識形態が適應して居るのである。然らば或時代の經濟組織とは何であるかと云ふに、其の時代の生產力の發展階段に適應する所の生產關係の總和である。所で Marx に依れば其の經濟組織の內部に於て生產力が次第に發達成長を遂げる結果として、從來保つて來た所の生產關係との適合が必然的に破れる、換言せば、生產力が變

化すると共に必然生産方法が變化するのであつて、此の事に依つて又生産關係の變動が起り、之れと同時に一切の社會關係の變化が生ずる事になるのである。故に畢竟社會一切の變化の根本的原動力となるものは社會の生産力の變動である。

社會進化の考察が斯の如き見解を基礎としてなされる場合に於て、社會一切の變化を左右する程の斯くも偉大なる力を持つ生産力とは果して何であるかといふ事が先づ問題になるのは至極當然の事である。而して唯物史觀に於ける所謂生産力の意義に關してはマルクス主義者其のもの丶間に於ても既に屢々喧しい問題となつたのであるが、未だ此の字義の解釋に對して確然たる定説あるを聞かないのである。併し乍ら、之れを以て單に技術的概念に過ぎないと解釋しても（例へば Herman Gorter）、又物質的生産力とは經濟的勞働の全物質的要素の綜合であると定義しても（Tugan-Baranowsky）、更に又、社會の物質的生産力と名付くる所のものは其の社會に於ける生産要具の量と勞働力の量とを包括すると説明しても（Bucharin）、總て彼等は、生産力の意義を最も廣く解釋して「社會的生産行程に入り込む所の總ての力、即ち技術と勞働と自然との三つの生産力」の綜合なりと説く Heinrich Cunow と共に、一切の社會的關係の發達を規定するものとしての生産力の發達が、再び社會的條件に依つて制約せらるゝと共に、就中自然的地理的條件に依つて著るしく制約せられるといふ一事は　之を認容せざるを得ないであらう。勿論社會的條件が其の社會の生産力に及ぼす反作用云々の問題は、マルクス主義の立場から云へば（マルクス主義に對する批判的立場から云へば自ら別箇の問題であるが）、左程重要なる問題ではないかも知れない。併し自然的地理的條件と生産力との關係に至つては然かく簡單ではない。故に Marx 自身も亦此の問題に關説する事決して少なくないのである。

既に筆者は本文の冒頭に於て、人間が自然に對する二重の關係を指摘した。即ち、一方に於ては、人類及び人類社會は畢竟自然といふ巨大なる總體の一部であつて、人間の生活は決して此の自然の大秩序から逸出し得ないといふ點である。此の點から自然的地理的環境が人間の生活を決定的に制約するとの思想が生れるのである。然るに他方に於て人は、外界の自然を人類の社會と對立せしめて考察する。此の場合に於て自然は人類の欲望を充足せしむる所の物質的手段を不斷に供給する外界の存在である。故に Marx は言ふ、「人類に必需品を、直ぐに間に合ふ生活資料を最初供給する土地（此中には經濟的に水も含まれる）は、人類の援助なしに、人間勞働の一般的對象として存在して居る。勞働によつて只全地球との直接の聯絡から引離されるに過ぎぬ總ての物は天然自然に存在する勞働對象である。即ち其の生活要素たる水から引離され漁られる魚、未開森林に於て倒伐される木材、其鑛脈から引裂かれる粗鑛などがそれである。……土地は彼の本來の必需品室であると共にまた彼の本來の勞働要具庫である。」（註一）自然は採鑛、狩獵、耕作といふ樣な勞働部門に於ける直接の勞働對象である。換言せば自然は進んで加工し得可き原料並に一聯の生活要具を決定する。

而して Marx に依れば、全統一體の、或は相對立する此の二つの部分――外界の自然と人類社會――を連結する所のものは人間の勞働行程である。「勞働は先づ人と自然との間の一行程である。即ち人が自然との其代謝機能を、彼自身の行爲に依つて仲介しつゝ、調節し管理する所の一行程であ

る。人は一の自然力として自然物質そのものに對立してゆく。人は自然物質を彼自身の生活に使用し得る形で占取する爲に自身の現身に屬して居る諸々の自然力卽ち腕や、脚や、頭や、手を運轉する。彼は此運動に依つて、自身の外部にある自然に働きかけて其れを變更しつゝ、同時に彼自身の性質を變更する。彼は自身の性質の裡に眠つて居る諸々の伏能力を展開し、それらの力の活動を彼自身の支配下に置く。」（註二）

さて翻つて考ふるに、社會が其の存續を完うせんがためには、不斷に、Marx の所謂自然物質を獲得して來なければならない。夫等のものに依つて人は直接、其の衣食住の欲望を充足するのみならず、夫等のものゝ助けに依つて、樣々なる方針の下に益々深く自然の中に穿入し、斯くて初めて自らを自然に適應せしめ、自然を自らに適應せしめ得るのである。而も社會が存續し得るためには此の生產行程は不斷に更新せられねばならない。或る一定の時期に或る一定量の小麥や長靴や肌衣等が生產せられ、此等一切のものが此時期の間に消費し盡されるものと假定せば、生產は正に時機を誤たずして一の新しき循環運動を始めねばならない。一の循環を以て他の循環を持續し踏襲する所の生產が不斷に繰返されねばならない。此の循環（所謂生產循環）の反覆といふ立場から考へられる所の生產行程は卽ち再生產行程として表示せらるゝものである。（註三）斯くて社會と自然との間の代謝機能の行程は卽ち社會的再生產の行程である。此の行程に於て社會は人間の勞働のエネルギーを消費して一定量の自然のエネルギー（自然物質）を獲得する。而して此の場合に於て、消費したるものと獲得したるものとの差額が明に全社會の發展に對して決定的の重要性を有して居る　卽ち社會的勞働の生產性（Produktivität der gesellschaftlichen Arbeit）――生產物の量と費されたる勞力の量との關係――が社會の發展を左右するといふ事になるのである。換言せば、社會的勞働の生產性は「社會と自然との間の全差額を表示する」ものであるから、それは「環境と組織との間の交互關係の指示器である。其は環境に於ける此組織の地位を決定し、其の變化は社會の全內部生活に於ける必然的變化の方向を指示する」。（註四）

然るに此の社會的勞働の生產性を左右するものは、言ふ迄もなく、社會の物質的生產力である。若しも我々が或る社會が幾何の生產力を有して居るかを知るならば、此の事に依つて、社會的勞働の生產性が如何であるか、如何なる程度迄社會が自然を支配し、如何なる程度迄社會自らが自然に適應して居るか、といふことを知る。例へば、生產力の進步發達が行はれず、社會的勞働の生產性が同一の狀態に停滯して居る場合を想像すれば、――其處で行はれる再生產は同一の基礎の上に常に同一の舞踏を反覆する所の單純再生產である。――斯の如き社會では進步も退步も行はれないであらう。此の場合社會と自然との關係は固定的の平衡を支持して居るのである。然らば生產力の發達增大したる場合如何といふに、玆では社會的勞働の一部が解放せられて社會的生產の擴張に轉向される。卽ち以前に存在して居た生產の要素が生產せられる許りでなく新しき要素が生產の領域に投入せられる。生產は同一の道を繰返さず同一の循環を行はずして、より廣汎に擴げられる。こは擴張再生產の場合である。此時社會と自然との間の平衡は積極的な流動關係に置かれて居る。卽ち社會は進步する。次に生產力衰頽の場合は全然之れと反對である。此の場合に於ても勿論再生產行

程は同一の循環運動を反覆しないのであるが、第二の場合とは正反對に、生產の領域が次第に狹められ、從つて社會生活の基礎は次第々々に狹隘となる。社會と自然との間の平衡は新しき基礎の上に恢復せられるけれども、其の基礎は漸次縮少せられる。こは云ふ迄もなく社會の衰頽を意味するものである。(註五)故に生產力は自然と社會との交互關係に對する指示器となつて居る。そは社會的發展の程度に對する正確なる指示器である。

茲に再び生產力とは何ぞやとの問題に逢著するのであるが、それは兎も角として、Marx が「骨の遺物の構造が既に亡び去つた動物種屬の身體組織の認識に對して有する其の同じ重要性を、勞働要具の遺物は既に亡び去つて諸々の經濟的社會形態の判斷に對して有して居る。何が造られるかでなく、如何にして、如何なる勞働要具を以て造られるかゞ諸々の經濟的時代を區別立てる」(註六)と言つて居る語に依つて、畢竟社會の物質的生產力と社會的勞働の生產性とは再び技術に依つて表示せれる、即ち社會的勞働器具の組織即ち社會の技術が社會的發展に對する正確なる物質的指示器を形成するものであるといふ事だけは、少くとも言はれ得る譯である。實に技術の發明と之れが利用とに依つて、人は他の動物種屬を超えて自然を征服し、自然に對する能動的適應を完成する。故に此の意味に於て又、社會の進步は常に技術の發達に依存するといふ事が言はれ得る。近世資本主義的產業組織の下に於ける未曾有の技術的進步は、資本家が最早や之を利用し得ざる程度に迄生產力の未曾有の發達を成長せしめたとは、Marx の屢々言明する所である。然らば Marx は此の赫灼たる技術的成功に眩惑せられて、生產力に對する自然的地理的條件の制約を無視したのであらうか。事實は全く之れに反するが如くである。

(註一) Karl Marx; Das Kapital. I. Bd. Volksausgabe. Ss. 134-135. 高畠素之氏譯、資本論、第一卷、第一册、二九九～三〇一頁、高畠氏譯文に據る以下同じ。

(註二) ebenda. S. 133 邦譯二九七－二九八頁

(註三) Bucharin; Theorie des Historischen Materialismus. 1922. SS. 117-118.

(註四) ebenda. S. 124.

(註五) ebenda. SS. 129-131.

(註六) Marx; a. a. O. SS. 135-136. 邦譯三〇二頁

七

社會的再生產行程を以て社會と自然との間の代謝機能の行程なりとして考察する事前述の如しとせば、我々は又、自然的地理的條件が二重の關係に於て之を制約するといふ事を容易に看取し得るのである。第一に、自然は直接、欲望を充足するための生活資料を供し、又此の目的の爲めに進んで加工し得る原料を供する。第二に、自然は生產要具のための原料を決定する。Marx は之を次の如く述べて居る。「社會的生產の多かれ少なかれ發達したる姿容は暫く措き、勞働の生產力は諸々の自然條件と結合して居る。之れ等の條件は總て、人種などの如き、人間それ自體の性質と、人間を圍繞する自然とに歸する事が出來る。外部的自然條件は、經濟的には二箇の大部類に分かたれる。其一は生活資料の自然的富源、即ち肥沃なる土地、魚類に富む河海湖沼など、第二は活潑なる落流、航行し得可き河川、材木、金屬、石炭などの如き、勞働要具の自然的富源之である。」(註一)

Plechanow は Marx の「生産力」に於ける自然的條件の制約を最も強く指摘して居る。曰く、「Marx は經濟的發達の問題を、社會的生産力の發達原因の問題に歸着せしめて居る。而して終局の形式に於て、社會的生産力は先づ第一に、自然的地理的關係を指示することに依つて解決せられる」と。（註二）彼は說明して言ふ、自然の構造は、人間の欲望充足に役立つ自然産物の性質を決定すると同樣に、人間が同一目的のために産出する生産物の性質を規定する。例へば金屬の存在しない所では、人は自己の力を以て所謂石器時代の限界を踰ゆる事は出來ない。同樣に原始漁獵民や原始狩獵民が牧畜及び耕作に移り得るためには、其れに適應せる自然的地理的關係即ち一定の植物及び動物が必要である。併し啻に之れのみに止まらない。既に最も低き文化階段に於て、各種族は相互に接觸して其の産出物の多くを交換して居る。此の事に依つて、各種族の生産力の發達に影響する所の自然的地理的環境の限界は擴張され、從つて發達の速度も亦高められる。自然的地理的事情が此の關係を容易にし又は困難になし得ることは至極明白である。既に Hegel は河流及び海洋は人間を結合せしむるが山脈は之に反し人間を分離せしむると述べた。但し海洋は比較的高度の生産力の發達階段に於てのみ人間を結合し得るのであつて、之れが低度の發達階段に於ては、Ratzel が正しく指示せる如く、海洋は反つて種族を分離せしめ彼等の相互關係を困難ならしめるものである。（註三）何れにもせよ、自然が多樣であればある程生産力の發達を助勢する事は確かに大である。Marx は言ふ、「社會的分業の自然的基礎を形成し、又人類を圍繞する自然狀態の變化に依り人類をして自身の欲望、能力、勞働要具、勞働方法等を多樣化せしむるものは、土地の絕對的豐饒性ではなくて、土地の差別性即ち其の自然的産物の多樣性である。」而も自然的地理的關係は單に原始民族に對してのみならず、所謂文化民族に對しても大なる影響を及ぼすものである。「一の自然力を社會的に制御し、節約し、人間の手の大規模事業に依つて始めて之れを占有或は馴致する必要は、産業史上、最決定的の役割を演ずるものである。斯くて例へば埃及、ロンバルヂー、和蘭等に於ける給水調節が其れである。或は運河に依る灌漑が單に必要不可缺なる水のみでなく、其水の沈泥と同時に山々から鑛物性肥料を土地に供給する所の、印度、波斯等に於ける給水調節が其れである。亞剌比亞支配下の西班牙及シシリーに於ける産業繁榮の秘密は即ち運河開鑿であつた。」（註四）

故に Plechanow は曰く、Marx に依れば自然的條件の作用は、一定の土地に於て一定の生産力の基礎の上に發生する所の生産關係に依つて仲介せられる。併し乍ら此の土地の自然的關係こそ正に生産力發達の第一條件である。」（註五）

（註一）Marx; a. a. O. S. 451. 邦譯第一卷第二册四一〇頁
（註二）Plechanow; Die Grundprobleme des Maxismus. Autorisierte Übersetzung von M. Nachimson. 1922. S. 44.
（註三）ebenda. SS. 44-45.
（註四）Marx: a. a. O. SS. 452-453. 邦譯同上、四一二-四一三頁
（註五）Plechanow. a. a. O. S. 50.

八

自然的地理的環境が社會の生産力從つて又生産方法に及ぼす影響に就ての斯の如き見解は、Plechanow も屢々指摘する如く、既に Ratzel が其の「人類學地理」（"Anthropogeographie"）及び人

種學（"Volkerkunde"）中に於て表明せる所である。Cunow が、「Ratzel の人類學的地理學的見解は更に廣く正しく繼承され補綴せられて直接 Marx の社會的歴史的觀察に導かれて居る（註一）と述べて居るのも、恐らく此點を指示したるものであらう。唯、Marx の最も力說せんとする所は、所謂自然的要素は其れのみにて全然作用することなく、其れが經濟行程の一構成部分である限りに於て、即ち其れが勞働力及び技術と共に經濟の中に置かれて始めて作用すると看做したる點である。「所謂地理的要素は、其れが一定の地理的範圍の住民に生活必需品を供給し、又彼等の經濟的方法に影響する限りに於てのみ、此の住民の發展のための一要素である。併し發展が啻に其の社會の中にのみ行はれずして同時に一定の領域の上に行はれるとしても、而も歴史を作るものは此領域の自然ではなくて、其の自然と協働する所の人間である。自然は發展に對する前提條件と手段とを供するといふ事が出來よう。併し此の手段が利用せられるか如何か、其れ等のものが如何に適用せられるか、それに依つて如何なる効果が得られるかといふ事は、人間即ち彼の勞働行爲と勞働手段とに依存して居るのである。」（註二）Tugan-Baranowsky が、「マルクス主義は人間の歴史に及ぼす外界自然の影響を拒むものではない。併し Paul Barth が『社會學としての歴史哲學』（"Philosophie der Geschichte als Soziologie"）に於て人類學地理的と呼ぶ所の歴史觀とは異なり、自然條件の人間に及ぼす直接の影響をではなく、寧ろ經濟の媒介に依つて人間に及ぼす其の間接の影響を重視する　總ての經濟は外界の自然に依つて與へられたる物的基礎の上に其の根據を置いて居る。然るに經濟の本質は此の外界の自然を變更する點に在る。斯くて經濟的活動に依つて一の新しき人工的環境が作られ、而して史的唯物論に依れば、其の發展が人間の歴史を進行せしむるのである」（註三）と言つて居るのも亦之と同意義である。

而も歴史的發展が自然的地理的條件に依存する事甚だ大であるといふ點は、決して Marx の看過しなかつた所である。唯彼は、自然的地理的環境の人類社會に及ぼす影響は文化の發展と共に次第に減ずるといふ事を述べて居るに過ぎない。換言せば、經濟的環境が次第に勢力を占むるに至つて（即ち技術が發達するにつれて）自然的環境の力は次第に弱められると主張するに過ぎないのである。原始時代にあつては、恐らくは自然的環境が人間の社會生活に對して殆ど決定的の影響を與へて居たといふ事は、Marx と雖も全然之を否定しなかつた所であらう。前節に於て記したる如く、彼は外部的自然條件を經濟的に、一、生活資料の自然的富源、二、勞働要具の自然的富源の二大部類に分ちたる後更に言を進めて、其等の與へる影響に關しては「文化の初期に於ては右の第一種類の自然的富源が決定的であり、より高き發達段階に於ては第二種類の方が決定的である」（註四）といふ樣な所說をなして居るのである。

勿論 Marx は、技術の應用が既に最も初期に屬する人類の社會に於て存在して居た事を指摘して居る。曰く、「一般に勞働行程が僅かに或程度まで發展するや否や、それは既に加工された勞働要具を必要とする。最古の洞穴の中に、我々は石の道具や石の武器を發見する。加工された石や、木材や、骨や、介殼など、並んで人類史の初期に於てはまた、馴らされた、即ち既に勞働に依つて變更された、飼養された畜類が勞働要具としての主なる役目を演ずる。勞働要具の使用及び創造は、

萌芽狀態に於ては既に或動物種屬の間に存して居るにしても、人類獨特の勞働行程を特徴づけるものであつて、從つてフランクリンは人間を定義して『道具を造る一動物』と言つて居る。」更に附言して、「勞働要具は單に人間勞働力の發達の分度器であるばかりでなく、猶また勞働が其中に行はれる社會的事情の指示器である」と。（註五）故に技術を生産力と同視し、技術の發達のみを以て社會的發展を左右する原動力であると見る論者にとりて、此の Marx の所說は先に筆者の述べ來りし所とは甚だ矛盾するかの如く觀せらるゝに相違ない。併し乍ら技術を以て「人間勞働力の發達の分度器」及び「社會的事情の指示器」であると云つて居る場合に Marx の眞に意味する所は畢竟、生産行程に適用されたる技術なるものは、生産上の發展が如何なる程度迄進步したか、就中人間が如何なる程度迄彼の欲望に適する如く自然物を變形する事を知り、又自然力を利用する事を知つたかの尺度として役立つといふ事に過ぎないから、自然的條件が社會的發展の上に甚だ決定的な影響を持ち得るといふ事とは決して矛盾する觀念ではない。加之、或技術が發明され且つ應用さるゝがために自然的地理的環境が殆ど決定的の影響を有して居るといふ事は少しく原始民族の生活を注視したものには明かなる所であつて、技術の發展が次第に之等の束縛或は限界を脫して專ら社會的發展を左右するの力となるに至るのは、固より、人類の文化的發展に伴へる結果であると言はなければならない。

Cunow は、Engels が其の「家族、私有財産及び國家の起源」（"Der Ursprung der Familie, des Privateigenthums und des Staats"）に於て、Morgan の技術的階段に依る社會的文化發展の分類（註六）を殆ど其の儘採用して居るのを批評して、之は Engels 自身が技術と自然的條件との關係、及び生産行程に於ける一定の技術的勞働手段の應用は此の行程に於ける二者の適合に依存すとの事實を、全然明確にして居らないものであると述べて居る。論者の見解に依れば、亞米利加の人類學者 Morgan（彼と共に Engels）は最も初期の技術的發展は同一の段階を經て行はれたといふ事を直ちに前提として居る。彼等の分類に從へば、穀物栽培の初期及び土器製作の時代に迄及ぶ所の、人類の全野蠻時代（Wildheit）に於ては、其の期間を通じて一般に技術的發展が全然同樣に經過したのであるから、從つて一民族の技術的進步は全民族に共通するものとして「地方性を顧慮することなくして」考へられ得るのである。然るに野蠻時代の後に於て始めて「兩大陸の天與の相違」が經濟的技術の上に影響を及ぼすに至る。即ち Engels は言ふ、「未開時代（Barbarei）の特長とす可き點は動物の馴養飼育と植物の栽培とである。さて東大陸所謂舊世界は、馴養に適した總ての動物と、唯一種を除いて培養し得可き總ゆる種類の穀物とを有して居た。西大陸即ち亞米利加は之に反し、馴養し得可き哺乳動物の中唯々駱馬だけ、而もそれすら南部地方の一部が之を有するに過ぎず、又一切の穀物の中唯一種、而も最上のもの即ち玉蜀黍を有したに過ぎない。斯の如く自然條件の相違する結果、爾後各半球の住民は各々其の特殊の行路を進み、個々の階段を限定する境界標も亦、兩半球の夫々に依つて相違する事になつた。」（註七）

さて Cunow の評すらく、疑ひもなく此の說は正當である。併し「天與の相違」は所謂野蠻時代に於ても亦同樣に影響を及ぼして居たのであつて、未開時代の階段では此の相違は、Morgan や

Engelsの假定して居るよりも遙かに著るしかつたゞけである。又、若しも或る技術の發生及び適用が一定の自然の前提條件を有するものとせば、即ち特殊の自然的關係が與へられて居ない場所では其等の技術が發見さるゝ事もなく從つて生活資料の生産に適用され得ないものとすれば、既に民族の最も低度の發達階段に於ても亦彼等の技術は多種多樣でなければならない譯である。何となれば、自然的條件は氣候の寒暑に依りて異なる、又濠洲と北亞米利加又は亞細亞、中部ブラジルの原始林と南バタゴニア若くは南亞弗利加の高原地方といふ樣に各地方毎に夫々異なつて居るからである。雷に動物界及び植物界が全然異種のものである許りではなくて、一定の武器や道具を生産するに必要な物質、水流の關係、土地の豐饒性、其等のものが根本的に相違して居る。故に若しも自然民族の技術と生活方法とを各々比較して見るならば、我々は最も多種類の相違を見出すであらう、と。（註八）

斯くてCunowは、技術的階段に依る此の分類が畢竟「人類の發展に關する分類中最も躁暴なる假說であつて、同時に其れは分類としては、從來なされたる同種のもの〻中で最も人工的である」として之を排するRatzelの論文（註九）の一句を引用し、自然民族の技術的發達を常に研究して居るものは、Ratzelの此の批評の正當を認めざるを得ないと斷じて居る。「Engelsが殆ど無條件でMorganの分類に同意を表して居るのは、總ての技術上の發展が自然的條件に依つて制約せられて居るといふ事を充分認め得なかつたがためである。然るにMarxは『資本論』第一卷に於て常に繰返し繰返し、自然的條件に依る此の制約を指摘して居るのである。」（註十）

（註一）Cunow: a. a. O. II. Band. S. 166.

（註二）ebenda. S. 167.

（註三）Tugan-Baranowsky; Theoretische Grundlagen des Marxismus. Leipzig. 1905. SS. 16-17.

（註四）Marx; a. a. O. S. 451. 邦譯同上第二册、四一〇頁

（註五）ebenda. SS. 135-136. 邦譯同上第一册、三〇二頁

（註六）Lewis H. Morgan; Ancient Society. 1877.

（註七）Friedrich Engels; Der Ursprung der Familie, des Privateigenthums und des Staats. S. 4.

（註八）Cunow; a. a. O. SS. 246-247.

（註九）Ratzel; Lewis Morgans Forschung über die Entwicklung des Staates. 1894. "Kleine Schriften von Friedrich Ratzel; ausgewählt und herausgegeben durch Hans Helmolt" 所收 S. 271.

（註十）Cunow; a. a. O. S. 248.

九

Marxの唯物史觀に於ける生産力の意義に關しては幾多の異說があつて、論者は各自の立場から種々なる解釋を之に與へて居るといふ事は前述したる所であるが、既に生産力に及ぼす自然的地理的環境の重大なる影響に關してMarx自身の考察せる所以上の如しとせば、此の一事を以てしても、かの技術の力を過重視して恰も之れのみが社會的發達を制約する唯一の要因なりと觀ずるが如き解釋（註一）の、如何にMarxの眞意を遠ざかるものであるかゞ理解せられるのである。「外界の自然も亦確にMarxの言ふ意味の生産力の一つである。」（註二）

併し他方より見れば、假令自然の及ぼす影響が如何に大であるとしても、人間が再び自然に對して與へる反動的影響は又甚だ大である。人間は其の發展の經過と共に、或は原始林を開拓し、栽培

を行ひ、動物を飼育し、或は沼澤地を乾燥し、殖林を行ひ、運河を開鑿するといふ樣な事に依つて次第々々に自然の環境を變化する。而して斯の如き變化は、既に發見せられ且つ之れが利用に適する所の、一定の技術的勞働要具の發達に依つて行はれるのであるが、斯くして變化したる自然的環境は再び違つた形で人間に作用する事になるのである。だが更に我々の注意を喚起する事は、人間は其の發展の總ゆる階段に於て決して同一の方法で自然の影響に反應するものではないといふ事である。衣服や住居の發明改善、野生の植物や果實の栽培改良、人工的食料の生産、有害なる傳染病の絶滅等に依つて、人は次第々々に其の自然的環境の影響を、彼自身の性質に有利なる方向へ導いてゆく。其れと同時に人間は、彼の勞働行程に必要なる勞働對象（原料品）及び勞働要具を他の地理的領域から導き入れることに依つて、次第に其の地理的生活環境の自然的條件から獨立するに至る。例へて云へば、原始的關係に於ては製銅業なるものは其のための自然的條件、詳言せば銅や燃料や一定の勞働器具の存在して居る所に於てのみ形成せられ得たのであるが、より進歩せる發達階段に於ては、人は銅や石炭や機械を他の場所から齎し得るからして、斯の如き産業は其のための自然的豫備條件が缺けて居る所に於ても亦同樣に喚起せられるのである。確に斯の如き獨立は或る程度迄常に可能である。人は今や自然的環境に對する彼の從屬を、其の社會的環境に對する從屬の增加に對して交換する。

Marx 並に Engels は、生産方法が地理的範圍の自然的條件から愈々益々獨立してゆく事を反覆說明して居る。例へば「排デューリング論」に於て次の如く記されて居る。

「資本主義的大工業は既に其の原料生産地の地方的制限から相對的に獨立して居る。織物工業は輸入原料品に依つて其の大量を生産して居る。西班牙の鐵鑛は英國及び獨逸に於て加工せられ、西班牙及び南米の銅鑛は英國に於て加工せられて居る。各炭田は其れ等の國境を超えて年々增大する産業の領域に燃料を供給して居る。歐羅巴全沿岸に於ける蒸汽機關は英國の石炭所々では獨逸及び白耳義の石炭に依つて運轉されて居るのである。資本主義的生産の制限から解放される社會はより以上遙かに進展することが出來る。其の社會は、全産業的生産の科學的基礎を理解する所の、且つ生産部門の總體を終始一貫其の團體員に依つて實行する所の、總ゆる方面に亘つて訓鍊ある生産者の團體を生み出すから、從つて其の社會は、非常に遠隔の地から得られる原料又は燃料の運輸勞働を充分償ふて餘りある所の、新しき生産力を作り出すのである。」（註三）又曰く、「生産機關を社會の手に掌握すれば、商品の生産は全く止み、同時に生産物が生産者を支配する事も止む。社會的生産の無政府狀態は無くなり、秩序整然たる組織となる。個人的の生存競爭は全く消滅する　茲に於て人間が始めて遂に他の動物界から明白に區別せられ、從來の動物生活から眞の人間的生活に入る。人間を圍繞して、從來人間の生活を支配した外界の事物が、今や人間の指揮統御の下に來り、人間は始めて茲に自己の社會組織の主人となり、從つて意識的なる眞の自然界の領主となる。從來、自然法と同じく人間と對立して人間を壓して來た其の社會活動の法則が、今や十分の理解を以て、自由に使役される事になる。從來、自然界と歷史との必然に迫られて生じた人間の社會組織が、今や人間の自由活動の結果となる。從來、歷史を支配して來た外界の客觀的諸勢力が、今や人間自身の統

御の下に來る。只だ其時から以後、人間が段々意識的に自分の歴史を作るだらう。只だ其時から以後、人間が仕組をした社會的諸原因が、大體に於て、そして段々に多く、其の豫定の結果を齎すであらう。之が即ち、必然の王國から自由の王國への、人間の向上である。」（註四）

（註一）例へば Paul Barth; Die Philosophie der Geschichte als Sociologie S. 132 以下を參照せられたし。彼は Marx に於ては生産方法と技術的經營形式とは同意義であると解し、而して自らは、經濟はこれに適用されたる技術のみによつて決して左右せらるゝものでないといふ事を指摘しようとして居る。

（註二）Tugan-Baranowsky; a. a. O. S. 8.

（註三）Friedrich Engel; Herrn Eugen Dürings Umwälzung der Wissenschaft. Stuttgart. S. 320.

（註四）ebenda. S. 306. 堺氏譯文に依る。

十

斯くて其の經濟的活動に於て人類は自然の掣肘に服從すと雖も、其の服從たるや遂に絶對的のものではない。實に人類を以て他の動物種屬と峻別する所の根本的特長は、自然的環境が一切の他の生物を形作るに反し、人間は多少此の環境を變形し得るといふ點に存する。人類が斯くて次第に經濟的源泉を支配するに至るは、知識の普及、技術の進歩及び科學の發達に依つて自然力を左右するを得るが故である。されど人類社會は Engels の期望する如く、彼を圍繞する外界自然を完全に指揮統率して自然界の王者となるの時期に達するであらうか。

我々は既に人間の不斷の努力が總ゆる方面に亘つて自然を征服しつゝあるを見る。例へば土地を耕耘し、肥料を施し、或は粗放的耕作より集約的耕作に移る事に依つて、土地の物理的成分と共に化學的成分を變化する。斯くて瘠地荒土を變じて豐沃ならしむるのである。又人工に依る動植物の變種、改良、移植等に依つて如何に其れ等の自然的狀態を變化するに至るかといふ事は前段屢々管見したる所である。自然の狀態中之を變化する事最も難事とせらるゝ氣候すらも、殖林、灌漑等の手段に依つて多少の緩和を計り得るが如くである。就中自然的環境の變化に向つて人間が最も著大なる成功を達成せるは、疑ひもなく地理的障碍を克服せるの點に在る。Seligman に依れば、こは運輸交通の方法に於ける三重の改良發達によつて行はれて居る。曰く、貨物の運輸、動力の輸送及び思想の交換が之である。（Principles of Economics, 1921. p. 46）。洵に自然科學の領域に於ける未曾有の發達、十八世紀後半以降相次げる技術上の發明、改良及び其の絶大なる成功、近世産業に適用されたる機械の著るしき增加、其の驚く可き機能等は、人知を以て無限に自然力を支配し得可しとの見解を生ぜしめたるものである。而も廣大無邊なる自然力の作用に比して、人間の支配し得たる所果して幾何であらうか。此の事は、例へば人類が、未だ其の力の及ばざる廣袤數十數百萬平方哩の土地を擁し乍ら、最も狹隘なる面積の上に其の生活を極限され、絶えず人口增殖の問題に關心せざるを得ないといふ一事に想到するを以て足るであらう。

人類は遂に外界自然の完全なる征服者となる？吾人は今や空想にも等しき無限の未來に論及する事を避けねばならない。人類は畢竟自然の一部に過ぎざるを以て又自然の大秩序から逸出する事は出來ない。彼は自然を征服するのではなくて自然に適應し自然に調和するのみである。斯くて畢竟自然的地理的環境に對する經濟學的考察は、人類が其の欲望充足の目的に向つて如何なる方法によ

り又如何なる程度迄自然との適應關係を得つゝある乎を探求し、又將來の人類社會の進歩發展に向つて如何にして此の適應關係を擴大し助長し得る乎。如何にして益々之れが調和を克ち得可き乎を觀察せんとするに他ならないのである。（完）

（附記）本文は倉皇の裡に執筆し、充分推敲の暇なかりし爲め、自ら不滿とする所尠少なからず。されど筆者は其の研究上、今後屢々這般の問題に論及す可きを以て、夫等の機會に於て之れが未熟を補はん事を期するものである。讀者諒せられよ。

一九二五―六―一七

前號（第十九卷第六號）目次

（大正十四年六月號）

卸相場と小賣相場の關係について　高城仙次郎

正統派の利潤論　津田誠一

「共産黨宣言」剽竊問題　平井新

新刊紹介――高橋龜吉著、金融の基礎――太田正孝著（改訂增補）國民豫算論（堀江歸一）

理財學會記事

第十九卷前半總目次

一冊定價金五拾錢
半ケ年分金貳圓九拾錢
一ケ年分金五圓四拾錢
郵稅金壹錢五厘
郵稅共

編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛

營業に關する用件は發賣元宛

原稿締切期日は發行の前月十日限

大正十四年六月廿日印刷納本
大正十四年七月一日發行

毎月一回一日發行

三田學會雜誌

禁轉載

第十九卷第七號

編輯兼發行者　東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾內　江田熊保

印刷者　東京市赤坂區新町五丁目四十二番地　金子鐵五郎

印刷所　東京市赤坂區新町五丁目四十二番地　金子活版所

發賣元　東京市芝區三田貳丁目壹番地　丸善株式會社三田出張所　電話高輪一九二六

尙ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す

發行所　東京芝三田慶應義塾內　理財學會